

# 「生きる」ことを体感する身体教育 —大正自由教育における成蹊学園の実践とそのコンテクスト—

清水 諭

## Physical Education: Bodily Experience in "Life" —Practices and Contexts of Seikei-gakuen in Taisho Free Education—

SHIMIZU Satoshi

The purpose of this thesis is to analyze the ideas and practices in Seikei-gakuen by historical research, especially by the network of Haruji Nakamura, Yataro Iwasaki and Shigezo Imamura.

Students of Seikei-gakuen experienced bodily in totality of life through living with other students in dormitories, farms and grounds. And teachers thought that democratic dialog was important for the education.

This atmosphere was made by teachers and others who emerged from the network of the Junior High School attached to Tokyo Koto Shiha that Nakamura, Iwasaki and Imamura graduated from and related to Jigoro Kano. You can see the alternative tendency that is different from the standardized and collective discipline, sink into the body in this "nation".

**Key words:** Technique du Corps, Network, Seikei-gakuen, Habitus

### 1. はじめに

すでに大正期の自由体育についての研究は、入江克己氏が1913(大正2)年に公布された学校体操教授要目とその批判、そして永井道明と可児徳の対立の経緯をふまえて様々な学校における体育実践を歴史的に研究している<sup>1)</sup>。入江は、その視点を「教授要目はとかく形式、画一に墮しやすい日本のスウェーデン体操を主な内容としており、…新たな国民教育の課題や自然主義的な遊戯や競技(スポーツ)を中心的な内容として構想する活動的体育論等、言葉を換えれば、多様化しつつある体育科教育論に対応できない限界を内蔵していた。その点は、すでに嘉納等の教授要目やスウェーデン体操に対する批判に典型的に読みとることができ、それは、やがて永井と可児徳の論争へと転回していくことになるが、以後大正期自由体育は、客観的にはこの教授要目批判を一つの梃子として歴史的社会的要求に応えるために体育の全体構造

をいかに再編成していくかが中心的課題となるのである<sup>2)</sup>。」としている。そして、成蹊、成城小学校や旭川尋常小学校、鹿児島師範附属小学校の実践から第一次世界大戦前後の軍隊主義体育批判と自由教育に対する干渉、さらに大正後期の千葉師範附属小学校や岡崎師範附属小学校での実践を追っている。入江は、それらを自由主義体育、個別体育実践、自然主義的体育とその立場を名づけながら、子どもの主体的な発達という側面が体育のなかでどのように扱われてきたのかに焦点を当てて述べている。それは、入江のほかの研究から一貫している視線、すなわちファシズムに影響され、からめとられていく教育実践に対するひとつの抵抗の姿勢としてとることができるだろう。

しかしながら、この「国」の人々の身体技法<sup>注1)</sup>がどのようにして形成されてきたのか、とくに学校教育の様々な場面で、あるいは一般社会での集団行動を考える際に、この「国」の人々の意識の

底に潜んでいるある「形」に画一的かつ集団的にはめ込もうとする規律・訓練的な身体性が存在していることを考えると、明治初期以来の体育科教育の実践をその視点からあらためてみていくことは重要に思われる。清水は体操に焦点を当て、明治から大正にかけての永井道明が押し進めたスウェーデン体操や教授要目に対する嘉納治五郎や可児徳との対立を事例としながら論じている<sup>3)</sup>。そこでは、どれをこの「国」の身体技法のモデルとするのかの対立が東京高等師範学校、東京女子高等師範学校における派閥あるいは権力争いを交えて歴史的になされ、その当時の権力の中核にいる個人の身体経験(海外留学を含めて)を基にした個人(の身体)と個人(の身体)との格闘、すなわちハビトゥスとハビトゥスとの格闘の歴史があるとした<sup>4)</sup>。

今なお学校などで残っているこの「国」の人々の身体奥底にあるのは、名目として「自然科学的見地」、すなわち「生理・解剖学的見地」「国民の健康」「体力の向上」「衛生的側面の改良」「良好な発育・発達」といった自然科学的知識からみた健康・体力・衛生面の向上を目的としてはいるものの、その実は、集団への従属、集団における美的価値の強調を促すものとして作用している規律・訓練的身体である。

だが、こうした東京高等師範学校や東京女子高等師範学校内での権力闘争とは別に、純粋に子供たちの教育を考えていた流れとして大正期自由教育の風潮のなかで成立した私立学校が存在していた。成蹊学園、成城学園、玉川学園などの私学はその代表といえる。そこでは、毎日の授業が遠足を取り入れ、自然の中での植物や動物観察、そして労働を通して身体をトータルに自覚させるものであった。また、成城学園や玉川学園では小原國芳によって、上記のような権力闘争から排斥された三橋喜久雄も関わりながらデンマーク体操が取り入れられていった。こうした実践的教育は身体の全体性を捉えるなかで生まれてきたものであり、そのことは大正期自由教育を考える上でも重要な要素であると考えられる。

本稿ではそうした成蹊学園、成城学園、玉川学園の流れの中で、とくに成蹊学園に焦点を当て、その創始者とそれをめぐるネットワーク、さらにその教育の実践を追いながら、この「国」におい

て周縁ではあったけれども身体の根源に立ちかえった教育の可能性の萌芽が大正期に存在していたことを歴史的に捉えてみたい。

## 2. 東京高等師範学校附属中学校のネットワークと嘉納治五郎の影響

成蹊学園の前進である成蹊園は、1906(明治39)年中村春二(はるじ、1877-1924)が今村繁三(1877-1956)の援助を受け、本郷区西片町に創立したことに始まり、翌年岩崎小彌太(1879-1945)もそれを援助するようになった。そして、1912(明治45)年4月2日に成蹊実務学校開校、1914(大正3)年4月に成蹊中学校開校、その翌年、成蹊小学校を開校していく。ここでは、この成蹊学園の創始者といえるこの三人について述べていくことにする。

三人は、1891(明治24)年に東京高等師範学校附属中学校に入学した同級生たちであった。そして、1893(明治26)年9月に嘉納治五郎(1860-1938)が東京高等師範学校の校長に赴任していることもあって、後に私塾を開くに際しても嘉納の思想が反映したといえることができる。

中村春二(宮内省御歌所寄人、中村秋香の嗣子)は、岩崎小彌太(三菱社長で後に日銀総裁となった岩崎彌之助[三菱創始者岩崎彌太郎の弟]の嗣子。1888(明治21)年の暮れに学習院をやめ、翌年3月に東京高等師範附属小学校に転校、1891(明治24)年に附属中学校に入学している。)<sup>注2)</sup>と共に1896(明治29)年に附属中学校を卒業後、第一高等学校に進学した。同級生には、大久保利賢(としかた、後、横浜正金銀行頭取)、馬場鑓一(後、大蔵大臣)、柳田国男(後、民俗学者)、長池長治(後、日銀理事)、長島隆二(後、衆院議員)、塩谷温(後、東大教授)、森田実(後、神宮皇学館長)、小原直(後、法務大臣)、松平恒雄(後、大使)、石坂音次郎(後、東大教授)、小林一郎(後、中央大学教授)、中島万次郎(後、成蹊実業専門学校長)、恒内松三(後、東京女子高等師範学校教授)等がいた<sup>5)</sup>。

1898(明治32)年に中村と岩崎は共に一高を卒業し、東京帝国大学に入学。中村は文科大学国文学科、岩崎は法科大学英法科に入学した。中村は、国文学を専攻して1903(明治36)年の7月に卒業、8月には父中村秋香の門下生加藤さきみ子(実践女学校教頭)の媒酌で下田歌子の教え子小藤小波と結婚している。そして、9月には附属中学校の同

級生大築仏郎が校長をしていた麹町高等女学校の学監に就任し、同時に嘉納治五郎の招きで東京高等師範学校附属の教員を勤めた。この時の附属の教え子には、石黒忠篤(後、農林大臣)、穂積重遠(父は法学者の陳重、母は渋沢栄一の長女。後、東大教授)、今村信吉(今村繁三の弟、後実業家)等があり、彼らと中村とは生涯親しくした。このほか、曹洞宗第一中学林、東洋音楽学校などで国語及び英語の講師をしていた<sup>6)</sup>。

こうした中で中村は「日本の教育が形式主義に墮し、人間の個性を無視した劃一教育の形をとり、訓育を忘れて智育教育にかたよっている現実を見てとった。そして、こうした教育の国家統制によってがんじがらめに縛りつけられている公教育では、真の人間の教育はなし得ない……<sup>7)</sup>。」と考え、自ら私学を起こそうと思うに至った。中村は、附属中学校の同級生永井松三の助言から、嘉納治五郎校長宅を訪ねて自分の意見を述べた上で以下のような嘉納の意見を聞いている。

「真の教育は官立学校では種々の制肘を受けて困難な面が多い。私立学校はこの点自由な立場で教育ができと思う。官学では勢い劃一的な教育に墮せざるを得ない。理想的形態は自由な立場に立つことである。今日本帝国の教育に欠けていることは智育に偏し、徳育が不十分なことだと思う。私立学校を起こしても官学の亜流では意味がない。精神教育を主眼とする新しい学校をつくってみてはどうか、しかし学校経営には金もかかることだし、まず私塾から出発してみてはどうか<sup>8)</sup>。」

このような嘉納治五郎の意見は、「……自分の天性の然らしむる所で、人を教えることを楽しみとし、己の力を以て世に施すをよいことと考えへたためであつた<sup>9)</sup>。」として大学を卒業後すぐに弘文館、さらに講道館といった私塾を起こした嘉納治五郎の経験や学習院や東京高等師範学校、同附属中学校・小学校で教員あるいは校長として実践の場で体験した様々な苦勞を踏まえてのものだったに違いない。

当時日本には、欧米から新教育思想が移入され、デューイやエレン・ケイが翻訳、出版されており、中村も少なからず刺激を受けていたと思われる<sup>10)</sup>。そのような思いの中、すでに1905(明治38)年2月に母校東京高等師範附属中学校長の三土忠造<sup>注3)</sup>推薦による地方の公立中学校長への就任を辞退していた中村は、その秋にたまたま新潟県を

旅行中に新聞配達や雑役をしながら中学校に通っている少年に会い、涙ながらに家庭の貧困のために高校進学のを希望を捨てねばならないことを訴えられた。恵まれた環境の中で生きてきた中村と違って、経済的理由で進学することのできない不運の英才が数多くいることを思い、教育のあり方に疑問を覚えると同時に、こうした埋もれている人材を国家社会の中堅として育成することこそ、自分に与えられた使命だと思うようになったのである<sup>11)</sup>。

一方、岩崎小彌太は父彌之助の命により(英国を選んだのは、岩崎彌太郎の長女春路の夫である加藤高明の意に従ったとされる)、1898(明治31)年に東大を退学し、英国ケンブリッジ大学への入学準備のため1900(明治33)年7月に出発。2年間ラテン語と古典を学習し、1902(明治35)年10月から1905(明治38)年までケンブリッジ大学専門学科に入学した。この英国で、附属中学校を卒業して以来リース校(1896～1899)に学び、1899(明治32)年から1902(明治35)年夏までケンブリッジ大学普通科に在学していた同級生今村繁三(今村銀行頭取、今村清之助の嗣子)<sup>注4)</sup>と大いに旧交を温めた<sup>12)</sup><sup>注5)</sup>。

岩崎は、中村春二の誕生日祝い(1901(明治34)年3月31日付)で次のような手紙を送っている。

「……廿世紀の後半に当りて見事健在、清浄なる社会を有する大日本帝国を建設する事に努められん事熱望の至りに不堪候。この為には、教育の事、重大に御座候。英国の学校教育は、個性を尊重し、自由なる雰囲気により行われ居り候。これに反し、日本の学生が教科書の詰込主義に毒され、自主的精神を喪失し居る現状に比するに、誠に羨ましき限りと存じ候。

小生帰国の上は、官庁の制肘を受けざる学校を起し、理想的教育に専念してみたく感じ居り候。貴君におかれてもこの点御考慮あつて然るべきかと存じ居り候<sup>13)</sup>。」

また、当時英国に留学中の三土忠造に「英国の学校教育は個性を尊重し、自由な雰囲気によつて行はれてゐる。これは日本の学生が教科書の詰め込み主義に毒されて自主的精神を失つてゐるのに較べ誠に羨ましい。私は日本に帰つたならば官廳の制肘をうけない学校を建てて理想的な教育をやつてみたいと思つてゐる<sup>14)</sup>。」と上記の手紙と同様に、日本の教育の欠陥を英国のパブリック・ス

クール流の個性尊重と自由なる雰囲気の中で身をもって感じとり、帰国後に公権力に左右されない理想的な教育に熱を入れたい旨が理解できる。また、岩崎小彌太が英国留学中にはWilliam Morris, John Ruskin, Bertrand Russell, Bernard Shaw, H.G. Wells等の唱道した理想主義的社会改良思想を国民各層に広めていったフェビアン協会が社会改革運動を押し進めていた時代であり<sup>15)</sup>、中村春二にヘンリー・ジョージ著『進歩と貧困』(1879)、フェビアン協会編『フェビアン論集』(1886)を贈っていることからしても、理想的な社会の実現と教育、さらにそれ以後の事業経営を社会に対する奉仕と考えた根底にはこのフェビアン協会の思想が深く影響していたことは間違いないと思われる<sup>16)</sup>。

もうひとり。今村繁三は中学卒業以来(1896(明治29))の英国留学中に父清之助が胃ガンで倒れていたが、1902(明治35)年にケンブリッジ大学卒業を機に帰国、9月26日に父清之助の逝去を見届けた。そして、弱冠26歳の若さで今村銀行の頭取に就任した。今村繁三も岩崎小彌太と同様にその当時のイギリスで社会主義運動の興隆をつぶさに見て取っていた。一般大衆が困窮に追いやられている姿を直視し、もしこのままに放置するならば、危険思想の萌芽は必然であり、資本主義は革命につながる危機に直面するであろうと考えていたのである。今村は、事業による収益の一部は社会奉仕のために投入すべきであると考え、社会福祉のために何か事業を起こそうと考えていたが、苦学生救済のために育英事業を起こすことこそ最も有意義な事業であるとした<sup>17)</sup>。

そこで、1905(明治38)年秋に、今村繁三は親友である中村春二と育英事業について相談した。中村春二は、すでに述べたように形式主義や画一主義的な教育から生徒を自由にし、さらに埋もれている人材を国家社会の中堅として育成することこそ自分の使命だと考えていたので、すぐにこの相談はまとまった。今村繁三は、1906(明治39)年1月23日の満30歳の誕生日を記念してこの育英事業計画を発表、基金としてさし当たり1万円を寄付し、事業の一切を中村春二に委託した。中村はこの基金1万円を今村銀行に積み立て、毎月50円の利子で小規模ながら私塾を開設したのである。

### 3. 成蹊園の誕生

成蹊園<sup>注6)</sup>は1906(明治39)年4月1日に中村春二の自宅である本郷区西片町に創立した。当初、塾生として中学生3名が選抜され、そのほかに中村が新潟で出会った苦学生に学資を給与して第七高等学校に通わせていたが、後に塾に編入された。

同じ年、英国留学から帰国した岩崎小彌太は、成蹊園の開設を聞いてすぐに賛同し、寄付に加わった。岩崎は今村と同様に1万円を支出、これによって1907年の成蹊園の基金は2万円となり、毎月の利子140円を奨学金に当てることとなった。第2期生には新たに宮本覚純ら6名が加わり、塾生は全部で10名となった。

その後、塾生が増えたことにより1908(明治41)年に駒込富士前町に中村春二の父秋香によって1000坪の土地が購入されその年10月に移転した<sup>注7)</sup>。

塾での活動については、以下のように記述されている。

「(過度の勉学のために身体を壊し、休学する者も出たことで)この為、塾長は体育の重要性を悟り、テニス、球投げ、角力等のスポーツを奨励し、機会をとらえては登山に連れていったり、遠足を行なったりした。

また鍛錬のために、早朝の駆足、夜間行軍、雪中行軍、冷水浴、園芸、草取り、掃除等を行なわしめた。

成蹊園における教育は、どこまでも個性尊重の教育であり、自由平等をうたう教育だったが、塾長は西洋流の個人主義を許さなかった。成蹊園は一つの小さな塾であったが、集団としての各員の協調を強く説いた。このため我儘を戒め、個人の勝手な行動を強く規制した。

塾生に身勝手なふるまいがあったり、集団としての統制を乱したりする行為があった場合は、塾長はその塾生に一对一で相対し、反省せしめた。面と向かって劇しく叱責することは避け、相対して共に長時間の座禅を行ない反省するのが常であった<sup>18)</sup>。」

このような実践を行う中村春二の教育方針については、『成蹊学園六十年史』で以下のように述べられている。

「中村春二は、自分自身をも含めた塾の教育方針として、現世に生きる人間を評価の基準となし、個性を確立し、一人一人の人間の価値を重要なも

のとした。人間はそれ自身価値があり、自分自身の存在を誇ることでできるものでなければならず、またこの世界に堂々と一人立ちする人間でなければならぬ。そのためには神に対してではなく、自分自身に責任をもつことでできる人間でなければならぬとした。そして中村は塾生の一人一人が、一人の人間として、自分自身の存在に自信をもつためには、健全な精神と肉体を持つことこそ重要であると考えはじめていた。そしてその目的を達成するためには、克己主義による鍛錬こそ、自己を完成するために重要な手段であると考えた<sup>19)</sup>。

成蹊園の評判は、今村や岩崎のネットワークから著名な実業家や、家族、政界関係者などに伝わり、後に華族の子弟が入塾することになった。今村繁三の妻俊子は、新田忠純男爵の次女であったが、新田の長男義郎、次男義実も入塾した。また、中村春二の母方の祖父鈴木香峯は駿河で著名な画人であったが、中村自身も洋画家岡不崩に師事するなどしており、友人関係にも多くの画家がいた。その関係で、相田寅彦(光風会)、中村彝(白馬会)、近藤芳男(美術学校在学)、坪井玄治(美術学校在学)<sup>注8)</sup>らが奨学金を支給されていた<sup>20)</sup>。

また、岩崎小彌太は三菱幹部を養成する目的で1907(明治40)年秋に三土忠造、中村春二、三好重道(英国留学中の友人)、木村久寿彌太<sup>注9)</sup>等に図り、菱友会を設立、翌年4月に本郷千駄木町の家屋で開塾した。塾長は三土忠造で、塾生の選抜は三土に一任された。最初の塾生は三土と同郷の香川県出身の帝大生南原繁(後、東大総長、日本学士院院長)のほか3名、それに成蹊園より1名が転籍し入塾した。このほかにも成蹊園塾生に菱友会会員としての資格を与える特別費が支給された者がおり、岩崎家直系の三菱大幹部養成所の観を呈したこの菱友会は、成蹊園と兄弟塾として互いに緊密な関係を結び、かつ後々に成蹊学園を支持する有力な母体となった。

#### 4. 成蹊実務学校の設立と中村春二のネットワーク

学生塾という形にあき足らないものを感じていた中村春二は、全寮制の学校を設立したいと考えようになった。中村は、たまたま東大総長山川健次郎の長男で、附属中学校の後輩である山川洵(まこと、後、東大教授)邸を池袋に訪ねた際、清水がこんこんと湧き出ている池を囲む広大な麦畑

に引かれ、学校設立地として山川にその土地についての調査を依頼した。そして、その翌年1910(明治43)年に父秋香が郷里静岡県興津で死去したことを機に30数万円の遺産と父の所有地を一切つぎ込むことを決めた。1911(明治44)年には池袋にある豊島師範の隣接地に500坪を借り<sup>注10)</sup>、その秋に移転を完了したのである<sup>21)</sup>。

そこで中村春二、岩崎小彌太、今村繁三の3人は、自由な教育を行うためには中学校令による中学校ではなく、各種学校令による実務学校とすることにし、名称を成蹊実務学校と定めた。1911(明治44)年9月に賛助員岩崎小彌太、今村繁三、校長中村春二によって発表された成蹊実務学校設立趣意書には、現今の時勢において堅固な品性を持ち、社会の中流で実務に当たり、国家の中堅となって国力の充実を図る人物が養成されるべきであること。現今の画一的教育にあつては、天賦の能力を十分に奮うことができないこと。貧困にあつて修学できないものの中に非凡の才能を持つものがおり、それを保護し、教養を身につけさせれば国家にとって有益であること。さらに、社会情勢を見れば、貧富の格差が増大し、危険思想が横溢している。慈善事業に頼り、その一時的な救済を待っているだけでなく、初等教育以上の自立自活の力を与える教育こそが何より重要であると述べ、その上で、以下のような設立の目的を掲げている<sup>22)</sup>。

- (1) 学資を免じて、中流以下の子弟に就学の便を與え、
- (2) 質素の風儀を作り、形式に馳せ華美に流るゝ時弊を矯め、
- (3) 俊才を集めて教育し、短時日に於て多くの修得をなさしめ、
- (4) 実務的学科を最も實際的に授け、以て実力を養成すると共に、師道を振興し、品性の陶冶に充分の力を用ひ、真に国家の中堅たるべき人物を養成し、
- (5) 之によりて社会に有用の人材を供すると共に、根本的救済の実を挙げんとす。

さて、こうした設立の理念を実行させる優秀な教員を集める必要があった。中村春二は、一高、東大以来の親友で、日蓮宗大学林教授を勤め、仏典の研究に専念していた小林一郎に人事構成を図ったところ、設立趣意書に共鳴し自らが教師になると申し出た。さらに、中村は附属中学校時代

の恩師遺沢恒猪に相談した。彼は、教え子の起こした学校に喜んで教諭として協力することを約束した。また、中村は附属中学校の同窓生でヨーロッパで博士の学位を取得して帰国した本郷高德の協力を得、その友人の林学士と土井藤平理学士から参加の承諾を得た。このほか、日本体操学校出身の体育教師として後藤松之助が参画、設立時に人事や経理で活躍した<sup>23)</sup>。

1912(明治45)年4月2日に入学式、翌3日に始業式が行われ、来賓には沢柳政太郎(後、文部大臣、成城学園校長。次男礼次郎を成蹊中学校に入学させている)、三土忠造、田沢義輔(内務相官吏後、貴族院議員)ほか15名が参加した。

その生活について、1915(大正4)年入学の黒沢清氏は以下のように記述している。

「それはまさに大正の松下村塾にほかならなかった。しかも近代教育思想に裏うちされた新松下村塾であって、勉学と勤労と精神錬磨が三位一体をなしている独自の学風の創造であった。毎朝七時に、先生も生徒も、講堂に集まり、三十分間静座し、無念無想に凝念することをもって、学校の行事が開始される。午前中は、勉学にうちこみ、午後は一時から五時まで、勤労作業にしたがって身体を錬磨する。生徒各自はすべて八坪の農場を持ち、自分の計画で、農作物を栽培する。夏休みはなくて、夏の学校がある。夏の学校では、冬着の綿入れの衣服をまとして、つねのごとく凝念を行い、勤労と勉学の日課は異ならない、ついでに冬のことをいうと、毎朝の凝念は裸で行い、雪の日、校庭でこれを行う。文部省令によるふつうの学校では、このような自由教育は行えないので、この学校は文部省の認可をうけない各種学校であるが、その教育のレベルは、実質的には、文部省令による中学校よりは、はるかに高い。中学校5年の教育内容は、三年で完了してしまう。成蹊実務学校は、制度としては五年制であるが、成績優秀の者は、飛び級を許し、三年ないし四年で卒業することもできる<sup>24)</sup>。」

また、1918(大正7)年入学の久米成次は、

「我々が成蹊教育の思い出で最も強く印象に残っているものと云えば、何といってもあの寄宿舎生活であろうと考えられる。

先ず八畳二間と四畳半一間に勝手炊事場付きの一戸建てが、第一舎から九舎まで。家庭的構成でということで、五年生から一年生までの組

み合せは、舎長一人五年生に、四年から一年までの全員九人が、ひとつの建物に住んでいた。そして、この寄宿舎生活は、朝五時の起床に始まり、はたきから掃き拭きの掃除をして、五時半から今度は裸足の駆け足が運動場で行われた。この起床から駆け足の始まり等は、凡てが太鼓の合図で行われた。

朝食は六時で、食事は炊事当番が二人宛交代で勤める定めになっていた。そして献立てから材料の調達、煮炊き調理、食卓への配膳と、それには発育期の栄養配慮も大事で、然も朝食から昼食・夕食と、配合も大いに気を配らねばならなかった。むろん昼食といっても、寄宿舎は校舎と同じ敷地内であったので、寄宿舎で済ませたのである。朝食が済むと、炊事当番は跡かたづけがあるが、朝の勉強に入り、臆て板木を合図に、八時から授業が始まるが、成蹊教育の象徴的行事である凝念が必ずその前にある。然かもその始まりと終わりに、お寺のような鐘が叩かれる。そしてその後は心力歌を唱えるのである。それにこの凝念で忘れ得ない記憶は、あのトタン屋根の板敷き建物一(それは凝念洞と呼んでいたが、仮の講堂で、また作業場でもあった。)一で、冬は寒く夏は暑かったことである。

又授業の特色的なことは、教室の中だけでなく、野外で園芸や畑作その他の労働を体験する作業という時間があったことであろう。授業が終ると、教室は無論のこと、校舎全体の掃除を、それに便所の清掃から汲み取り作業(これは校舎だけでなく寄宿舎の分も)等凡てが生徒の受け持ちであった。それを肥え溜めて糞がて肥料に出来上がると、畑の野菜作りに役立てる仕組みであった。

授業が終ると、今度は庭球だとか、蹴球といった野外スポーツ、それに卓球なども盛であった。それから又寄宿舎の掃除をして夕食となり、済むと机に向って夜の勉強時間に入った。午後八時からは又凝念(これは専門学校の講堂が使われた)があり、就寝時間は九時であった。

なお四季の行事としては、夏季成蹊池の水泳(これはシーズン始めに池の掻き出しがあった)、雑司ヶ谷墓地などでの試胆会、それに春秋の夜間遠足の時、鶴見の総持寺に行き、夜明け前の参禅が思い出される。……<sup>25)</sup>」

と記している。学校での授業は実務学校とはいえ

英語と数学に重点がおかれ、かなり高度のものであり、生徒ひとりひとりの能力に合わせて留年や飛び級がごく自然に行われていた。そして、その根底には自学自習が建て前としてあり、生徒自らが参考書や辞書を引いたりして知識を身につけていった。特に国語は自修独学任せ、また理科系の学習は観察、実験が主体となっていた。一年を上記のような生活様式で生活するのであるから、自ずと自然を身体を通して体感することができるに違いない。また、これらの基本にはあらゆる場所での教師と生徒との対話があった。上記の卒業生の回想からもわかるように、何より生活のどの場面においても身体的経験を重んじていたため、身体と身体とを通じたコミュニケーションが中核にあったはずである。朝の凝念は、岡田式静座法に座禅(中村は、僧堂教育に関心を持っていた)の精神を加味したものとされ、端座して目を閉じ、無念無想の境地に身を置くものであった。我々の身体が自覚している丹田に気を集め、精神と肉体とが合致した身体性を実感させるものとして非常に効果を発揮したとされる。また、食事作りから屋外での作業、さらに様々な行事によって自然の中で自分たちが日々生活していることを実感せずにはいられなかったはずである。まさに、生活をすべて自分たちの力で実践していく中で「生きるとは何か」を身体まるごとで体感する教育だったのである。

こうしたことは、文部省からすればまったくの異端であったが、少数精鋭主義を貫き、その中で個性を重んじ、その発見伸長による英才教育をうたっていた中村春二の英才教育、さらには人物教育の実践の形であった<sup>26)</sup>。そして、その後の成蹊学園教育として小学校から中学校、高等学校へと組織化する根源的要素となった。

## 5. 成蹊中学校の創立と東京高等師範附属中学校のネットワーク

このように、成蹊実務学校が一般の中学校とは明らかに異なった教育をしていることで、とくに東京高等師範附属中学校の卒業生たちから中学校として開設してくれるよう要望する声が多くなった。明治の終わりから大正にかけて東京で名門中学校とされたのは、府立一中、四中、附属中、暁星中、開成中、芝中、麻布中、学習院中等科などであったが、これらに入学することは困難を極め

ていたため、中村、岩崎、今村の母校の者たちが要望したのである<sup>27)</sup>。1913(大正2)年の春には、附属中学同窓生の代表として永井松三(外務書記官)と高木兼二(医学博士)が中村宅を訪れてこのことを要請し、さらに7月には彼らに岩崎と今村を加えて岩崎邸に会し、成蹊中学校設立を満場一致で決定した。この時永井は、「成蹊実務中学校における教育こそ、真の人間教育であると思う。……中村君が、中流以下の家庭の子弟のみを対象とする気持ちはわかるが、中流あるいは上流の家庭の子弟に対しても門戸を開いてもらいたい。自分は附属中学の校風を愛するが、そこには官立という制約があり、改むべくしてなお、改むべからざる事情があるように思う。教育の理想は、私立学校における自由な教育でなければ実現はむずかしいと思う。このため、ぜひ中学校を新設して、模範とする中学教育を実施してもらいたい<sup>28)</sup>。」と発言している。

早速結成された理事会は、理事長に中村春二、理事に岩崎小彌太、今村繁三、永井松三、そして高木兼二が就任した。成蹊中学校に始まる成蹊学園の源流は、東京高等師範附属中学校に見い出ることがここではっきりわかるのである。

また、教員の人事についても中村は実務学校の時と同様に附属中学校時代の恩師遺沢恒猪に相談し、附属中学校時代の同級生で茨城県土浦中学校の教頭をしていた比田重を主事に迎えた。1914(大正3)年4月3日の開校式には、上記の理事のほか、附属中学の同窓生も多数顔を見せ、とくに嘉納治五郎は満面の笑みをたたえていたといわれる<sup>29)</sup>。東京高等師範学校長嘉納治五郎は、成蹊中学校設立者の中村春二ほか、岩崎小彌太、今村繁三、永井松三、高木兼二、そして主事の比田重がいずれも附属中学校長時の卒業生であり、幹事となった遺沢恒猪も附属中学校の前教諭、さらに中学校教諭の内野台嶺、青木常雄も高等師範の教え子だったのであるからその思いも特別だったに違いない。

その後、翌1915(大正4)年に成蹊小学校、1916(大正5)年に財団法人「成蹊学園」が設立され、1917(大正6)年に成蹊女学校が開校されていく<sup>注11)</sup>。中村春二を中心として、実務学校時代の校風はこれらに連なるのである。

## 6. 成蹊学園の意味

成蹊学園は、この「国」に流れているある「形」に画一的かつ集団的にはめ込もうとする規律・訓練(軍隊において特別強調された)の考え方が見られる中で、それとは別の理念を持って実践していた<sup>注12)</sup>。それは、生活の全体、すなわち生きることを身体で問い直し、体感することから、生徒ひとりひとりが自らの力を伸ばしていく教育である。

これは中村春二、岩崎小彌太、今村繁三の東京高等師範附属中学校出身者の理念が大きく反映したものであった。彼らは附属の教育の中で、嘉納治五郎の松下村塾を理想とする私塾設立の考え方や遊びとその身体性、あるいは英国留学で培った生徒の個性の尊重や対話を主体とする思想、さらに社会改良運動の思想をその根底に持っていた。そして、学園設立当初の教員たちが一高、東大、そして何より東京高等師範附属中学校のネットワークから採用されていることを考えれば、この成蹊学園の根底には、おそらく東京高等師範附属中学校にあったハイトゥスが再生産されていたと思われる。そして、成蹊学園は当初貧困にある学生を救済する名目だったが、徐々に上流階級の子弟が入学するにつれて、このハイトゥスがその中で再生産されていったと考えられる<sup>注13)</sup>。これは、中村春二の教育理念とその実践からわかるように、ある「形」に画一的かつ集団的にはめ込もうとする規律・訓練の身体性とは異なる傾向を持つ流れのひとつだったということができよう。

成蹊学園は、明らかに文部省の押し進める理念と対立し、身体と身体との格闘の結果、周縁に位置するものであったけれども、もうひとつのこの「国」における身体性をここに見い出すことができる。そして、こうした身体の根源に立ちかえった教育の可能性は、その後、沢柳政太郎(次男礼次郎を成蹊学園に入学させている)の成城学園、そこから派生した小原國芳の玉川学園に連なっていく。この「国」の身体技法を歴史・社会学の視点で捉えていく際には、こうしたもうひとつの水脈を今後も考えていく必要があるだろう。その際、ここに示しているように幾重にも重なり、複雑に絡まっている人的ネットワークを解きほぐしていくことはその精神史を掘り起こす上で重要な手法と考えられる。

## 注

注1) M. モースが用いた語。人間の伝承的かつ有効な行為であり、集合的個人的な実践理性による独自の型(ハイトゥス)をもつものと定義できる。M. モース<sup>30)</sup>、清水<sup>31)</sup>を参照のこと。

注2) 三菱社長で後に日銀総裁となった岩崎彌之助の長男。父の兄、岩崎彌太郎は三菱創始者。代々兄と弟が社長を交代して勤めることから、三代三菱社長は、彌太郎の子の久彌、四代が小彌太である。小彌太の母早苗は、後藤象二郎伯爵の長女。小彌太の妹で長女の繁子は、松方正義公爵の次男正作と結婚している。成蹊園塾生宮本覚純(後、成蹊園、成蹊中学校教諭)は、一高生時代に松方正義家に家庭教師として住み込んでいる<sup>32)</sup>。

小彌太は、英国から帰国した翌年の1907(明治40)年に島津齋彬の弟島津三郎久光の四男珍彦を父に持つ(1889年に男爵を授けられ、後、貴族院議員)孝子と結婚している。この結婚式は松方正義伯爵が媒酌人となり、北白川宮能久親王妃殿下以下、大隈重信伯、林薫外相(小彌太が英国留学中の駐英公使で、面倒を見てもらっていた)、後藤新平伯、渋沢栄一男爵、加藤高明、犬養毅のほか嘉納治五郎も出席している。後に、孝子の甥の島津久幹(子爵)、忠彦(男爵)は成蹊園に学び、また、養子として林薫外相の孫である忠雄を迎え、成蹊学園理事にしている。

注3) 1871(明治4)年生まれ。1897(明治30)年東京高等師範学校卒業。英国留学中に岩崎小彌太と知り合う。帰国後、東京高等師範学校教授。1908(明治41)年代議士に初当選以来11回当選。高橋内閣の書記官長、農相。1927(昭和2)年田中内閣の文相、蔵相、1931(昭和6)年犬養内閣の通相、32年斎藤内閣の鉄相、1940(昭和15)年枢密顧問官、1946(昭和21)年幣原内閣の内相兼運輸相を歴任。1948(昭和23)年死去。成蹊大学名誉教授中村清一郎氏は、三土忠造の甥<sup>33)</sup>。

注4) 今村繁三の父清之助は、1888(明治21)年に今村銀行を設立以来、全国の鉄道会社の設立にあたり、鉄道王として有名。日清戦争から日露戦争にかけて展開された産業革命期において鉄道事業で巨万の富を得た。友人には、渋沢栄一、福地源三郎、大倉喜八郎、安田善次郎、益田孝、根津嘉一郎、岩崎彌之助、本山彦一、馬越恭平、阿部彦太郎等の財界人がいた。繁三は、父清之助が井上馨伯爵と親友だったことからその次女俊子を妻にしている。また、繁三の妹は、彼と岩崎小彌太が英国留学中に面倒を見てもらった駐英大使館の書記官であった松井慶四郎(後、駐英大使、外務大臣、枢密顧問官。男爵)と結婚している。



注5) このロンドンでは、このほかにケンブリッジに留学していた浜口担(1872-1939)や学習院、一高、東大を通しての親友だった松平恒雄(1877-1949)が外交官補として駐英日本公使館に赴任していたので交流している。浜口家は、紀伊国有田郡広村(現在の広川町広)に代々続いた郷士で、初代儀兵衛は元禄年間に千葉の銚子に醤油醸造の店を出し、ヤマサ醤油として今日に及んでいる。担は、「梧陵」の名で知られた七代目儀兵衛の末子。慶應義塾、早稲田大学を卒業後、1897(明治30)年にロンドンに到着し、当初同じく和歌山出身の南方熊楠と行動を共にしていた。はじめ田島姓を名乗っていた。1904(明治37)年和歌山県から衆議院議員となり、1912(明治45)年には当時日本で最新式の猪苗代水力発電会社の設立に関与し、1923(大正12)年に東京電灯会社に併合されるまで勤務していた。その年、麒麟麦酒会社監査役となったが、猪苗代水力発電、麒麟麦酒とも岩崎家が有力出資者だったので、小彌太との関係からと思われる。また、松平恒雄は会津藩主松平容保(かたもり)の四男。後、外務次官、駐米、駐英大使、ロンドン海軍軍縮会議全権委員を経て、1936(昭和11)年から9年間宮内大臣を勤めた。秩父宮勢津子妃の実父。初代参議院議長になっている<sup>34)</sup>。

注6) 「史記李将伝」にある一句「桃李不言下自成蹊」からとったものである。桃や李は、何も言わないが美しい花を訪ねて人が集まり、いつしかその下に小径ができる。すなわち、当世風の宣伝などはしなくとも、人格の花を開けば自ら人々がその徳を慕って集まってくるという意味である。この名称を提案したのは、中村の一高時代の同級生森田実(後、神宮皇学館長)だった<sup>35)</sup>。成蹊園は、北側が本郷通りをはさんで一高や東大に接しており、弥生町をぬけると上野不忍池に出られた。中村春二宅は、父秋香の家のひとつで向こう隣に陸軍技師滝大吉の二階家があり、大吉の甥で東京音楽学校生徒の滝廉太郎がいた。この西片町には、坪井正五郎、三好学、笹川臨風等の帝大教授らがいた。

注7) 付近には、岩崎家の別邸だった六義園や府立五中があった。

注8) 近藤、坪井は優れた才能を持っていたが、成蹊園から奨学金を受領していた20代で死去している。

注9) 岩崎彌之助邸のそばに岩崎家の学寮として潜龍窟があり、岩崎小彌太、中村春二、今村繁三の附属中学同級生に加え、小彌太の弟俊彌のほか木村久寿彌太も起居を共にしていた。木村は、後に三菱本社専務理事になり、1925(大正14)年には成蹊学園監事になっている<sup>36)</sup>。

注10) 成蹊の新校舎は、池袋駅の西に1909(明治42)年

4月開校の豊島師範学校の南50メートルの所に建てられた。1915(大正4)年には、この間に多田幼稚園(園長多田房之輔千葉県教育長、後に池袋幼稚園)が開園している。

その後、1914(大正3)年、1916(大正5)年に中村春二の個人出資によって5000坪ずつ買い取り、さらにその翌年には、岩崎小彌太、岩崎久彌、今村繁三の賛助員の支出15万円によって1万坪が購入された。これにより敷地総面積は2万坪余りとなった<sup>37)</sup>。

注11) 実務学校、実業専門学校(1917(大正6)年開校)は1922(大正11)年に廃校になっている。

注12) 確かに成蹊中学校には兵式体操の授業があり、現役陸軍中尉が熱心に教えに来ていた。しかし、中村春二は形式主義に陥っている軍隊教育を批判し、個々の精神を形式に陥らずに鍛錬していく方法を重視していた。さらに、彼は、大正初期の軍隊の力が高まる中で平和主義を貫き、侵略戦争に強く反対していた。「成蹊中学では体育を非常に重く取扱っていますが、体育は単なる体操ではなく、心身の鍛錬に重点をおいて、これを行っています。体育の時間における生徒の意気込みは、一旦緩急あれば、直ちに銃をとって立上がる気概を十分に示しています。徒らに法令によって、形式的に軍隊生活をさせても、たいした効果があるものとは考えません<sup>38)</sup>」。

このように兵式体操を行いながら、個性を尊重し、「生」を生きる教育を中村は行っていたのであり、それはどちらかがどちらかを凌駕するという形ではなく、ふたつが絡み合いながら進んでいったと言ってよいだろう。今後、中村春二の思想を探究しながら考えていきたい。

注13) ハビトゥスの再生産についての議論は、今後東京高等師範附属中学校、成蹊学園、さらにそのほかの公立中学校における生徒の活動、およびその階層について分析することから改めて論じたい。ここでは、仮説として提示するにとどめておく。

## 引用文献

- 1) 入江克己(1993): 大正期自由体育の研究, 不昧堂出版, 東京.
- 2) 同上, p.46.
- 3) 清水 論(1996): 体操する身体—誰がモデルとなる身体を作ったのか/永井道明と嘉納治五郎の身体格闘—, 年報筑波社会学 8: 119-150.
- 4) 同上, p.144.
- 5) 成蹊学園(1973): 成蹊学園六十年史, 成蹊学園, 東京, p.4.
- 6) 同上, p.7, 18.
- 7) 同上, p.18.

- 8) 同上, p.19.
- 9) 嘉納治五郎口述, 落合寅平筆録(1927-1930): 柔道家としての嘉納治五郎 (一), 嘉納治五郎傳, 作興, 東京教育大学柔道研究室(複写), p.160.
- 10) 前掲5), p.20.
- 11) 前掲5), p.22.
- 12) 岩崎家傳記刊行会編(1957→1979): 岩崎小彌太傳, 東京大学出版会, 東京, p.52, 59-63.
- 13) 前掲5), pp.11-12.
- 14) 前掲5), p.151.
- 15) 前掲12), p.66.
- 16) 前掲5), pp.13-14.
- 17) 前掲5), p.25.
- 18) 前掲5), pp.46-47.
- 19) 前掲5), p.48.
- 20) 前掲5), p.53.
- 21) 前掲5), pp.58-60.
- 22) 川瀬一馬 編(1981): 成蹊実務学校教育の思い出, 桃蔭会, 東京, pp.571-573.
- 23) 前掲5), p.78.
- 24) 黒沢 清(1981): 成蹊の思い出, (編)川瀬一馬「成蹊実務学校教育の思い出」, 桃蔭会, p.131.
- 25) 久米成次(1981): 成蹊教育の思い出, (編)川瀬一馬「成蹊実務学校教育の思い出」, 桃蔭会, 東京, pp.259-260.
- 26) 中村春二(1973): 英才教育について, および秀才教育から人物教育へ, 成蹊学園: 「成蹊学園六十年史」, 東京, pp.125-129.
- 27) 前掲5), p.147.
- 28) 前掲5), pp.147-148.
- 29) 前掲5), pp.151-153.
- 30) Mauss M (1985): Sociologie et anthropologie, Quadrige / PUF, Vendôme.
- 31) 清水 論(1993): 身体社会学を構築する意義とその可能性, 体育学研究 38: 1-11.
- 32) 前掲5), p.50.
- 33) 前掲5), p.57.
- 34) 宮川隆泰(1996): 岩崎小彌太 三菱を育てた经营理念, 中央公論社, 東京, pp.9-12.
- 35) 前掲5), p.31.
- 36) 前掲5), p.80.
- 37) 前掲5), p.73.
- 38) 前掲5), p.201.